

協働と省察を取り入れたワークショップ型校内教員研修システムの開発 ～東京都荒川区立尾久第六小学校における校内教員研修の実践を通して～

南部 昌敏*・長谷川秀紀**・金城 勲***・小林 稔****・
浦野 弘*****・三橋 功一*****・井上 久祥*

(平成22年9月30日受付；平成22年11月4日受理)

要 旨

教師同士の協働によるワークショップ型研修とそれぞれの教員による省察活動を取り入れた校内教員研修システムを開発し、東京都荒川区立尾久第六小学校において4年間継続して実践を行った。I D (Instructional Design) の考え方を基軸に、I C Tの活用と情報教育、図書活用と読書指導、地域人材活用と学校・家庭連携の3つの方策を盛り込んだ、効果的で魅力的な授業づくり・授業展開・授業評価の方法を取り入れた。その結果、初任者から熟練者までの教員の授業力の向上と児童の学力の向上及び学習状況の改善に寄与することが示唆された。

KEY WORDS

教師教育 教員研修 校内研修 授業力向上 学力向上 協働 省察 ワークショップ

1. 問題の所在と研究の目的

児童生徒の学習状況の改善と学力の向上は喫緊の課題となっている。それを解決するためには、教師の授業力を向上させることが不可欠である。村川 (2004, 2006, 2010) は、教師に「確かな学力」と「生きる力」を育むための授業開発力とカリキュラム開発力が求められるとし、「教師力」を高めていく方法としてワークショップ型研修の有効性を提案している。また、澤本 (2009) は、教師成長の鍵となる「実践知」形成の基礎である熟考と対話と協同を目指す授業研究の基本的な視点として、熟考と省察を通じて形成する実践知モデルを基盤とした、教師成長を目指す「授業リフレクション研究」の手法を提案している。

そこで、本研究では、教師同士の協働によるワークショップ型研修とそれぞれの教員による省察活動を取り入れた校内教員研修システムを開発し、それを4年間継続することによって、教師の授業力と児童の学力向上への影響を検討することにした。その際、授業改善のための視点としては、R.M.Gagnéら (2005) の提唱するI D (Instructional Design) の考え方を基軸に、I C Tの活用と情報教育、図書活用と読書指導、地域人材活用と学校・家庭連携の3つの方策を盛り込んだ、効果的で魅力的な授業づくり・授業展開・授業評価の方法を取り入れた。

2. 研究の方法

2. 1 実践研究期間

平成18年4月から平成22年3月 (4年間)

2. 2 実践協力校

東京都荒川区立尾久第六小学校

2. 3 校内教員研修システムの開発経緯

平成18年度より21年度までの4年間、尾久第六小学校では全教職員が協働して全校児童一人ひとりを看取り、その結果を共有しあうとともに、その実態を踏まえて、日々の授業の目標を達成するためにより効果的で魅力的な授業を協働して創造し、授業実践と授業観察及びワークショップの手法を用いた協働省察によってその授業のよさの確認と改善策の検討を行う校内授業研修会を継続してきた。そして、そこで見いだされた協働の実践知を相互に共有し合うとともに、各教員がその実践知を取り入れた授業を日々実践し、自己省察を通して授業のよさに関する協働の実践知の確認と自己課題の明確化を行い、そこで得られた実践知を基にして、次の授業の協働創造へと活かす活動を継続

してきた。換言すれば、協働と省察の積み上げによって、効果的で魅力的な授業の醸成を継続することで、その過程を通して、児童の実態把握力、授業構力、図書教材及びICTメディア選択開発活用力、人材活用力、授業展開力、授業観察力、授業評価・学習評価力等の授業力を向上し続けたのである。その結果、児童の学力は飛躍的に向上し、学習状況も改善され、現在も学力向上と授業力向上のマニフェストを掲げ、実践を継続している。

開発した「協働と省察を取り入れた校内教員研修の継続による持続的な授業力・学力向上モデル（尾久第六小学校モデル）」を図1に示す。

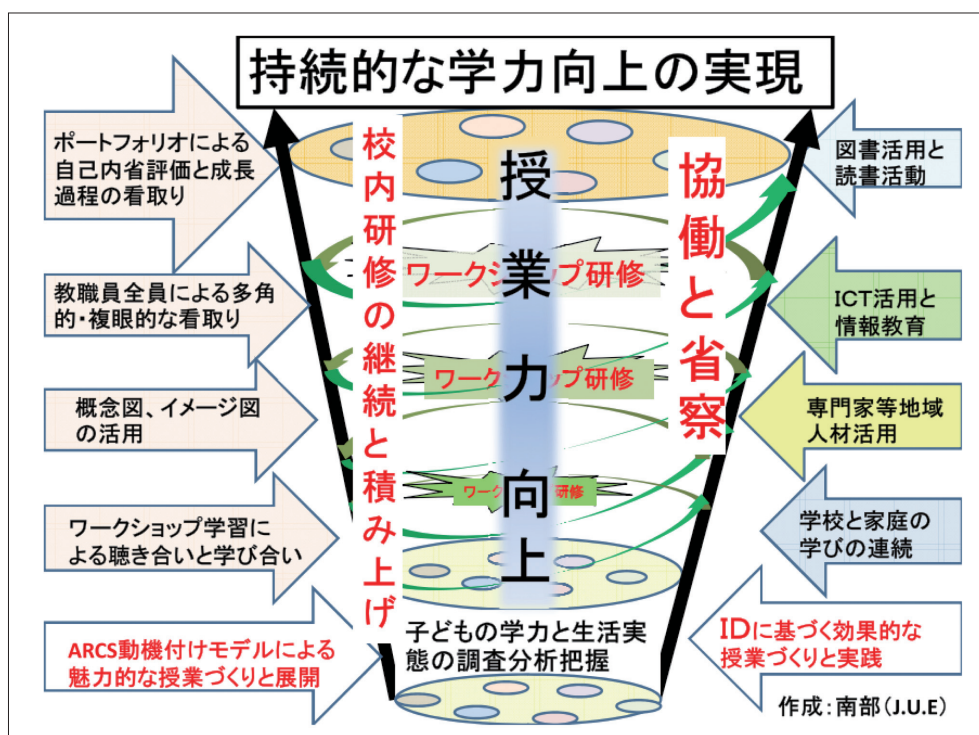


図1 協働と省察を取り入れた校内教員研修の継続による持続的な授業力・学力向上モデル（尾久第六小学校モデル）

このモデルは次に示す過程を経て全教職員で協働して創造したものである。

まず、荒川区において、平成14年度から各学校での指導の充実・改善に生かすために独自に行っている「学力向上のための調査」について、学習内容がどれだけ身につけているかを把握する「学習到達度調査」と学習意欲や態度がどれだけ養われているかを把握する「学習意識調査」の結果を全教職員で詳細に分析し、子どもたちの現状と実態を分析した。また、日々の学習や学校生活の様子を教師の視点で観察・記録し、それを教職員間で情報交換することも同時に行い、調査結果と併せて多面的に児童の実態の把握に努めた。それによって、尾久第六小学校の児童の特徴と課題を明確にし、それを全教職員で共有するところから始めた。

次に、各教員による日々の授業実践に目を向け、村川の提唱する「ワークショップ型研修」と澤本の提唱する「授業リフレクション」の手法を取り入れ、それぞれの授業のよさをさらに伸ばし、課題を改善する方策の検討とそれを活かした授業実践の継続と積み上げに教職員全員で協働して取り組んだ。具体的手順については、後述する。

その過程で、IDの考え方に基づく効果的な授業づくりとARCS動機付けモデルによる魅力的な授業づくりとその展開を考慮し、平成21年度荒川区教育委員会授業力向上プロジェクト指定研究「調べ、考え、伝え合う子どもを育てるための授業力向上」を目指して、ICTの活用と情報教育、図書活用と読書指導、地域人材活用と学校・家庭連携の3つの方策を盛り込んだ。児童ひとり1人が、調べ、考え、伝え合う学習に自ら取り組む過程で、学習モラル、学習習慣・学習継続力、問題解決力、発表・コミュニケーション力、共に学び合う力、評価力、論理力、発想力などを伸ばすための授業実践に取り組むことにした。そして、学習の見通しを持ち、学習課題一見通し一調べまとめ一発表・プレゼンなどの学習プロセスを身につけることができるよう、授業の改善に努めた。

また、学力を向上させるための手だてとして、①子どもたち同士の聴き合い、学び合いの手だてとして「ワークショップ学習」、②これまでに学んだ知識、理解したことを相互の関連づけをさせるための「概念マップ」として図

示させる活動、③イメージをふくらませるための方法として「イメージマップ」として図示させる活動を取り入れた。さらに、評価の方法として、児童が日々の学習活動で行った、観察記録カード、学習カード、ワークシート、文章で自分の考えを書いたシート、学習記録としての各自のノート、毎時間書いた振り返りシート等をバインダーに挟み、それを必要に応じて振り返りさせながら、自分自身の成長と変容を自覚させる、ポートフォリオに基づく個人内自己評価を取り入れた。そのポートフォリオは教員がその児童の成長を看取るためにも活用された。

2. 4 授業実践の方略

2. 4. 1 授業づくりに関する方略

授業づくりに関しては、I D (Instructional Design) の考え方を基軸に、次の2つの基本的考え方に基づいて授業づくりを行った。

a. その授業のねらいの達成のために、より効果的な授業を創造する。

R.M.Gagnéら(2005)の提唱する「9の授業事象(Instructional Events)」の考え方を援用し、次のように授業づくりをする。まず、新しい学習への準備を整える導入段階としては、①Gain Attention(学習者の注意を喚起する、情報の受け入れ態勢を作る)、②Inform Learners of the Objectives(学習者に目標を知らせる、頭を活性化し、重要な情報に集中する)、③Stimulate Recall of Prior Learning(前提条件を思い出させる、今までに学んだ関連事項を思い出す)を取り入れる。それにより、学習者は、その授業に取り組む構えができ、これまで学んだこととの関連性と新しい学習課題を自覚することができる。次に、この時間に学ぶことに関する新しい情報にふれさせるための情報提示の段階としては、④Present the Stimulus(新しい事項を提示する、何を学ぶかを具体的に知る)、⑤Provide Learner Guidance(学習の指針を与える、意味のある形で頭に入れる)を取り入れる。そうすることにより、学習者は、どのようなことを学ぶのかを理解することができる。次に、あたらしく学ぶことを自分のものにするための学習活動段階では、⑥Elicit performance(練習の機会を作る、頭から取り出す練習をする)、⑦Provide Feedback(フィードバックを与える、学習状況をつかみ、弱点を克服する)を取り入れる。そうすることで、新しく身に付けた考え方や技法について練習を繰り返し習熟を図ったり、覚えた知識を活用して探究課題を解決したり、また、それに対するきめ細かな適切な助言指導を行うことで、新しく学んだこと、できるようになったことを定着させることができる。最後に、学習で学んだことや身に付けたことを確かめ、忘れないようにするためのまとめの段階では、⑧Assess Performance(学習の成果を評価する、成果を確かめ、結果を味わう)、⑨Enhance Retention and Transfer(保持と転移を高める、長持ちさせ、応用がきくようにする)を取り入れる。そうすることで、自ら、有能感や満足感を味わったり、自信を持つことにつながるだけでなく、本時に学んだ知識や技法、考え方等の記憶が保持され、また、それが、新しい学習課題の解決に活用することができるようになる。

b. 学習者にとって魅力的な授業を創造する。

Keller(1984)の提唱したARCS動機付けモデルの考え方に着目した。ARCSモデルでは、学習意欲に関わって、「注意」(Attention)、「関連性」(Relevance)、「自信」(Confidence)、「満足」(Satisfaction)の4因子をあげている。この考え方を援用し、次のように授業づくりと授業展開の検討を行った。

まず、「注意」は、学習者の好奇心と注意を喚起し持続させるための手だてであり、学習者の注意を引き付け、それを持続するために、新規で驚きのある提示をしたり、情報欲求を刺激するために質問をしたり、問題を学習者に作らせたり、これまでとは違った方法を用いるなどして生徒の興味関心を維持するための方法を用いる。換言すると、学習者にとって「おもしろそうだなあ」と感じてもらうようにするための手だてである。

次に、「関連性」は、学習者の経験や考え方に関連している具体例を示すことで親しみ易さを感じたり、具体的にイメージすることができるようにしたり、または、その授業の達成目標や有効性を示す具体例を用意したり、学習者に目的を決めさせたりするなどして、学習者がなぜこの教材を勉強しなければならないのか、自分自身が今持っている興味や目的とどんな関係があるのか、将来の目的を達成するために役に立つものであるのかなどについて答えるようにする手だてである。換言すれば、学習者にとって、「やりがいがありそうだなあ」と感じてもらうようにするための手だてである。

次に、「自信」は、生徒が強く動機づけられるためには、受け入れることができる程度の成功の確率があると思うようにするために、できるようにならなければならないことは何かの評価の規準のようなものを提示したり、成功の体験ができるような挑戦レベルを提供したり、また、自分自身で学習に取り組む計画を立てそれをコントロールする機会を与えたりして、成功の原因を自分自身に帰するように支援することである。換言すれば、学習者にとって、「やればできそうだなあ」と感じてもらうようにするための手だてである。

最後に、「満足」は、現実に似た状況で、新しく習得した知識や技能を使う機会を与えたり、身に付けた行動が継

続してできるようにフィードバックや支援をしたり、あるいは、できるようになったことに対して肯定的なフィードバックや賞賛などを与えることである。換言すれば、学習者にとって、「やってよかったなあ」と感じてもらうようにするための手だてである。

以上のように、子どもたちにとって、「おもしろそうだなあ」、「やりがいがありそうだなあ」、「やればできそうだなあ」、「やってよかったなあ」の各段階を、授業展開過程に盛り込み、学習者にとってより魅力的な授業を創造すること、そのことによって、学習者は、自律的に積極的に意欲的に学習に取り組むことができるようになる。

2. 4. 2 授業展開に関する方略

筆者は、情報教育の観点から、「学習者は、学習活動の各場面においてそれぞれの目的に応じた情報活動を行っており、それぞれの場面で最適のメディアを効果的に活用して問題解決ができるように、教師は学習者1人ひとりに寄り添って支援を行っていく必要がある。」と考えており、授業展開に関してはその考えを基軸にした。

さらに、授業展開に関しては、中央教育審議会答申（2005）及び市川伸一（2008, 2009）の提唱する「習得型」学習と「探究型」学習の往還の考え方を援用し、次の3つの基本的考え方にに基づき、具体的な授業展開の検討を行った。

- 知識・理解の定着と技能の習得を確実に行う「習得型」の学習を行う。
- 身に付けた知識・理解、技能を活用するとともに、図書等の印刷情報やWebや映像等の電子情報及びICT等の情報手段を活用して課題解決に取り組む「活用型」の学習を行う。
- 知的好奇心と興味関心に支えられ、主体的・自律的・体験的・意欲的に課題追究に取り組み、学びのおもしろさを味わわせる「探究型」学習、の3つの学習を適宜相互に往還する授業実践を行う。

そして、上記の授業展開に関する基本的考え方を基にして、平成20-21年度の研究テーマ「調べ、考え、伝え合う子どもを育てるための授業力向上」を考慮し、図2に示す「学習プロセスモデル（尾久第六小学校モデル）」を開発した。

まず、授業展開にあたっては、はじめに、ICTメディアを用いてさまざまな最新の情報に出会わせたり、読書や図書資料を活用した調べ活動をさせる中でさまざまな情報に出会わせたり、さらに、地域で活躍している専門家や保護者の皆さん等に今取り組んでいる仕事のことや体験談を話してもらったりすることでリアリティのある情報に出会

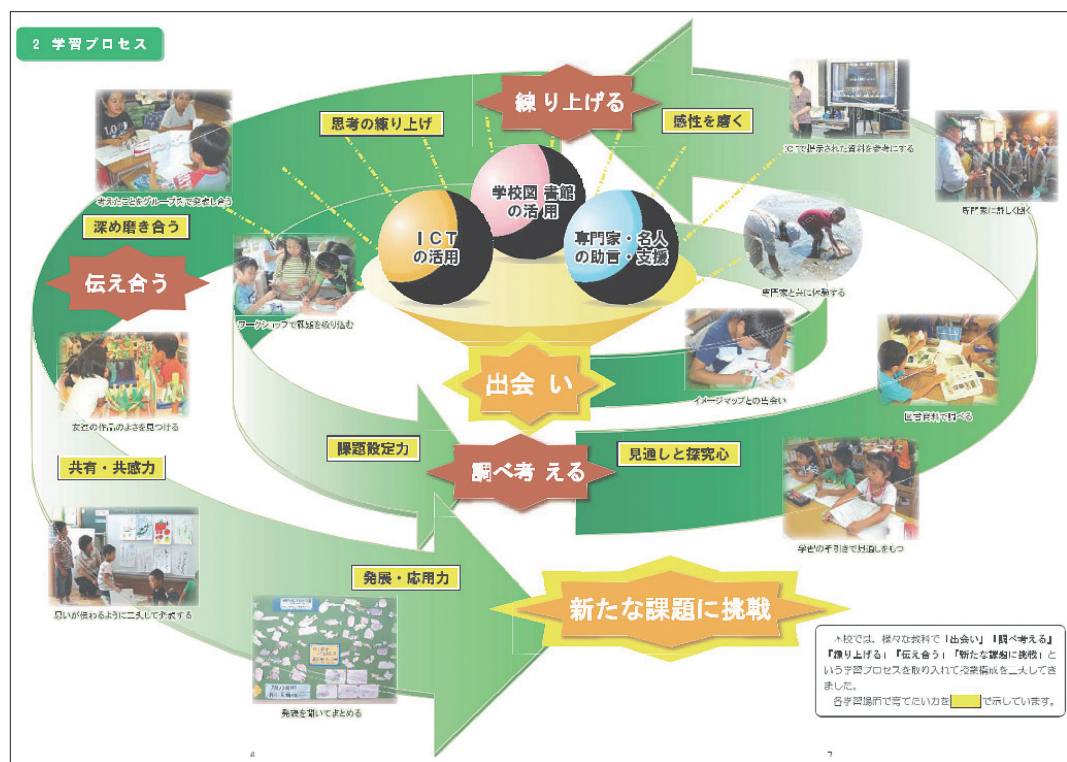


図2 学習プロセスモデル（尾久第六小学校モデル）

わせることから始める。すると、学習者は、その中から課題を見つけ、見通しと探求心を持ってさらに調べ活動を進め、個人個人で自分なりの答えを見つけることになる。それを、グループで、あるいはクラス全員で相互に披露しあひながら考え方の練り上げを行い、それを伝え合って共通の考えを醸成していく。その過程で、共感する力が身についていく。さらに、そこで身に付けた知識や考え方を次の学習課題に活用して、さらに探究活動へと発展していく。その繰り返しを継続し、積み上げていくことで、確かな学力を育成していくことができると考えたのである。

2. 5 校内教員研修の手順と授業改善モデル

吉崎静夫（2006）を参考に、本研究において開発した校内研修を通して授業力の向上を目指す授業改善モデル（尾久第六小学校モデル）を図3に示す。図3に示したように、校内教員研修は次の手順で行った。

- 低・中・高の学年部会において、協働して、授業づくりをする。
 - 分科会提案として代表者が授業実践を行い、全教職員で授業観察をし、授業者の良い点と改善点、学習者の良い点と改善点の4観点で気がついたことを付箋紙に記し、その直後に開催される授業検討会で、ワークショップ形式で協働して授業評価を行い、その結果を図にして発表と意見交換を行い、協働の実践知を形成する。
 - 各教員がその実践知を取り入れた授業を日々実践する。
 - 日々の授業実践を、各自で振り返り、よさの確認と課題の明確化を行う。
 - そこで得られた実践知を基にして、次の回の授業の協働創造の際に反映させる。
- 以上のa～eを繰り返し、継続して実践知を精緻化し、積み上げていく。

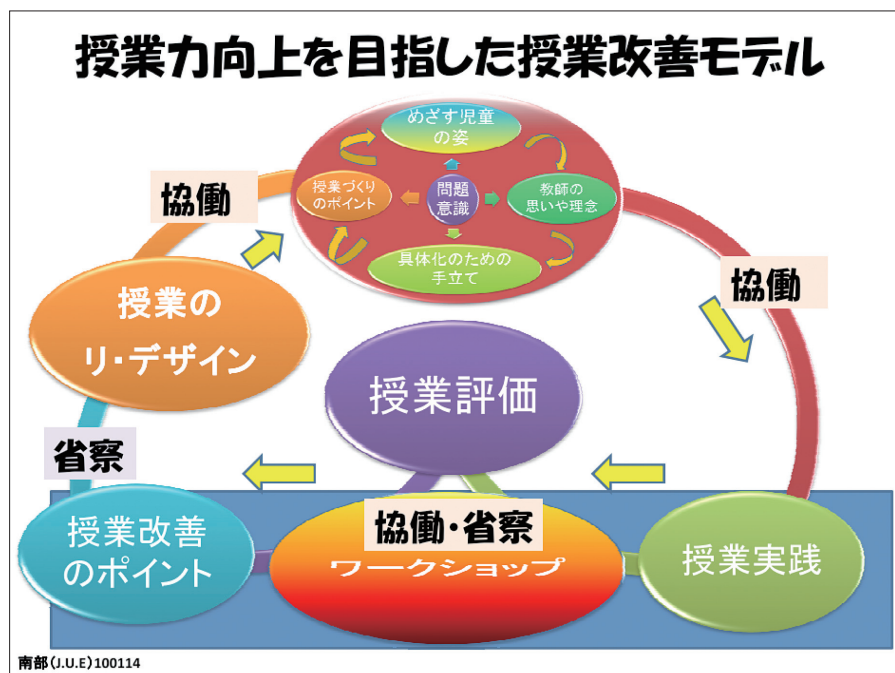


図3 授業力の向上を目指す授業改善モデル（尾久第六小学校モデル）

まず、教員一人一人は、担当している学級の全ての児童をどのような能力を持った子どもにしたいのか、による目指す児童像を考える。その際、同時に、教師としての思いや願いも併せて考える。そして、それを実現するための手だてを考え、授業づくりを行う。その際、これまでに述べた授業づくりの方略や授業展開の方略を自分なりに租借し、取り入れることになる。そのことを持ち寄り、上記の「a」に示した学年部会において協働して授業づくりをする。次に、「b」に示したように、代表者が授業実践を行い、全教職員で授業観察をし、授業者の良い点と改善点、学習者の良い点と改善点の4観点で気がついたことを付箋紙に記し、その直後に開催される授業検討会で、ワークショップ形式で協働して授業評価を行い、その結果を図にして発表と意見交換を行い、協働の実践知を形成する。写真1と2は、全教職員で授業観察をし、授業者の良い点と改善点、学習者の良い点と改善点の4観点で気がついたことを4色の付箋紙にそれぞれを記しているところである。1枚に1項目を記すとし、多い少ないはあるが各色20枚程度をそれぞれの授業観察者が書き上げることになる。写真3は、授業後に開催される授業検討会において、それぞれ

が記した付箋紙を模造紙上に出し合って、ワークショップ形式で分類整理をし、その結果を図にして、協働して授業評価を行い、授業のよさを更に伸ばす手だてと改善点を解決するための手だての提案を記述しているところである。写真4は、それを班毎に順番に発表し、質疑応答をして、最後は授業改善のポイントを研究主任が整理し、筆者が助言指導を行い、校長と副校長が講評をするという流れである。



写真1



写真2



写真3



写真4

その後、「c」に示すように、各教員がそこで得られた実践知を取り入れた授業を日々実践し、「d」に示すように、日々の授業実践を各自で振り返り、よさの確認と課題の明確化を行ったうえで、「e」に示すように、各自が自覚した実践知を基にして、次の回の授業の協働創造（授業のリ・デザイン）の際に反映させるというように展開する。

3. 結果とその考察

3. 1 教員対象のアンケート調査に基づく分析から

本教育実践の後半の平成21年10月に、教員を対象に、「これまでの取り組みを振り返って」というテーマで、本実践に対する意見を寄せていただいた。以下に、各教員がどのように受け止めたかの事例を示す。

教職経験が10年未満の先生方からは、次のような意見が寄せられた。

- ・子ども自身に気付かせることの難しさを感じ、予想される子どもの意見を前もって念頭に置いて、授業に臨むこと、子どもが気付き、学んだことを実践できる場を積極的に設けていくことが重要である。そして、ただ、日々の授業をこなしていくのではなく、必ず、自分の授業を振り返り、反省して、他の先生からの意見をいただくことで、よりよい授業を創造していくことができると思った。(H. I)
- ・自分の授業を振り返ってみると、子どもに何をさせたいのか、どんな力を付けたいのかが全く伝わらない授業になってしまった。まず、その点を念頭に置き、芯のぶれない教材研究を心がけ、どのタイミングでICTメディア

を用いたらよいかを見極めていこうと思う。(H.T)

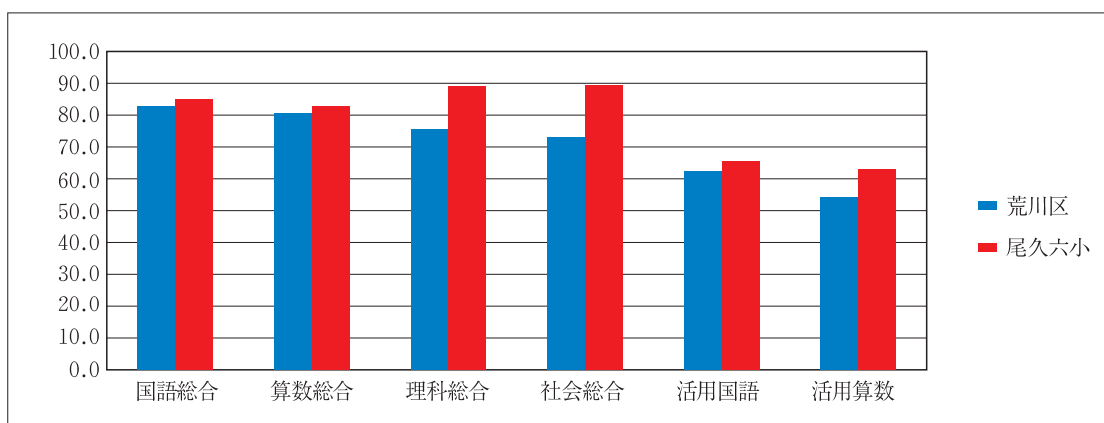
- ・内向的な私にとって、人前で発言するのはなかなか難しいですが、ワークショップによって、それを実現することができた。また、みんなで付箋を貼っていくことで、良い点や課題に関して話し合っている内容の概要が明確になった。この4年間、授業を構成する際に常に考えていたことは、「教材や指導方法の特性と必然性」である。いくらよい教材や指導法でも、本時のねらいや活動に適していなければ、その価値は半減してしまうということになる。(T.O)
- ・一方、教職経験が10年以上の先生方からは、次のような意見が寄せられた。
- ・ワークショップ型による協議会がこの4年間の積み上げで定着し、短時間で成果と課題をまとめられるようになった。職員間で授業について率直に意見を出しやすい雰囲気が生まれ、それが事前の検討会などにも現れてきている。(Y.I)
- ・30年以上にわたって研究授業と協議会を経験してきたが、このような形の話し合いは初めてである。シャッターチャンス逃さず記録できる付箋紙、討論の方向が明確なマトリックス表の描画、各自の考えを肯定的に受け止めるワークショップは革命的であった。何よりも、時間あたりの意見の量、焦点化した話し合い、発表による共通理解という点で、大変有意義な方法である。(N.E)
- ・本人が今もっているイメージを自由に広げていくためにはイメージマップが有効であること、あらたな知識や思考等の獲得があった場合は、コンセプトマップ(概念マップ)が有効であることが理解でき、今後実践を通して、確かめていきたい。学習プロセスを踏まえて授業構成を考えて取り組むことにより、児童の興味関心を持続させながら学習を進めることができることが理解でき、授業構能力をさらに磨いていきたい。新しい研究のあり方に会うことができた。教師としての原点に立ち戻ることができた。(K.O)

3. 2 児童の学力に関する分析から

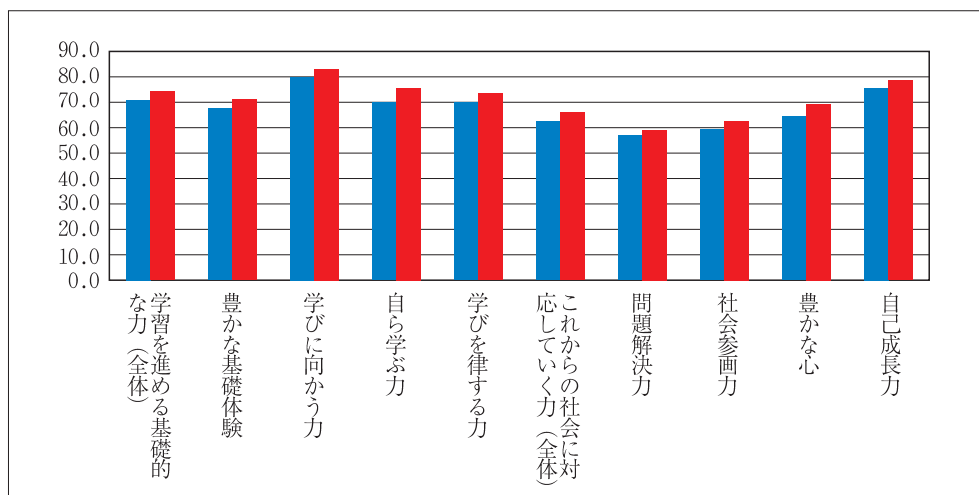
次に、尾久第六小学校では、児童の学力について荒川区において毎年継続して行われている学力調査の結果から、区全体の平均と比較している。その平成21年度「学力向上についての取り組みについて」には、平成20年度「学力向上のための調査」結果分析として、次のように公表している(一部抜粋)。

(1) 明らかになった成果

① 平成20年度の学力向上の取り組みの結果、全学年で実施した国語・算数、5年で実施した社会・理科、新たに調査が始まった5・6年で実施した活用(国語・算数)について、いずれも区全体の達成率を上回る結果となった。



また、意識に関する調査では、学習を進める基礎的な力ならびにこれからの社会に対応していく力のいずれも区全体の達成率を上回る結果であることが分かった。



これらの結果は、調べ、考え、伝え合う学習をテーマに進めてきた授業力向上をめざした教職員の取り組みとともに、子どもたちの学習に立ち向かう意欲と態度が向上してきた結果と考える。また、確かな学力を身につけさせたいという保護者の方々の願いと支持・協力も大きな土台としてあったと考えている。

以上のように、ワークショップ型校内研修は、全ての教員が自信を持って普段の授業実践に取り組むことを支援することができた。また、教師が自信を持って授業を行うことで、児童の学力の向上と学習状況の改善も図ることができた。

4. おわりに

本研究では、教師同士の協働によるワークショップ型研修とそれぞれの教員による省察活動を取り入れた校内教員研修システム及びそれを継続して実践に取り入れていくことで、初任者から熟練者まで全ての教員が自信を持って普段の授業実践に取り組むことの支援につながり、それが児童の学力の向上及び学習状況の改善に寄与することが示唆された。なお、本研究は、荒川区教育委員会授業力向上プロジェクト指定校として実践された。

また、本研究の成果は、平成21年度に、沖縄県島尻教育事務所管内の各小中学校に紹介するとともに、南城市立佐敷小学校、同馬天小学校において、それぞれの実態に応じた特色ある校内教員研修システムを構築し、継続的に実践的な取り組みが進められており、成果を上げている。

さらに、本年度からは、平成22～24年度科学研究費補助金基盤研究(B)(代表：南部昌敏、課題番号：22300283)による研究プロジェクト「協働と省察による校内教員研修が教師の授業力と学習者の学力向上に及ぼす影響」に引き継がれ、東京都荒川区尾久第六小学校での取り組みの継続と荒川区内への普及と定着、学力向上が喫緊の課題である沖縄県島尻地区の小中学校での実践の普及と定着への取り組みとともに、秋田県における小中学校での校内教員研修への取り組みに関する調査に基づく児童生徒の高い学力との関係の分析と他地域への普及の可能性の検討、北海道及び新潟県での取り組みへの着手等、本研究の成果の普及と定着に向けた実践的研究を推進している。

【謝辞】

本研究に御協力をいただいた東京都荒川区立第六小学校に平成18年度から21年度に勤務しておられた教職員のみなさんをはじめ、在籍しておられた児童の皆さん、保護者及び地域の皆さん、本研究の取り組みにご支援をいただいた荒川区教育委員会の諸先生方等、多くの方々にこころより深く感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- 中央教育審議会（2005）「新しい時代の義務教育を創造する（答申）」，文部科学省
- 市川伸一（2008）「教えて考えさせる授業を創る 基礎基本の定着・深化・活用を促す「習得型」授業設計」，図書文化
- 市川伸一・鎗木良夫（2009）「新版 教えて働かせる授業 小学校」，図書文化
- John M.Keller（1987）Development and use of the ARCS Model of motivational design. Journal of Instructional Development. 10（3）
- John M.Keller（2009）Motivational Design for Learning and Performance; The ARCS Model Approach, Springer SMB, 鈴木克明
- 監訳（2010）学習意欲をデザインする A R C S モデルによるインストラクショナルデザイン，北大路書房
- 村川雅弘編（2004）「ワークショップ型研修のすすめ」，日本文教出版
- 村川雅弘編（2006）「ワークショップ研修の手引き」，ぎょうせい
- 村川雅弘編（2010）「「ワークショップ型校内研修」で学校が変わる 学校を変える」，教育開発研究所
- 尾久第六小学校（2009）平成21年度荒川区教育委員会授業力向上プロジェクト研究指定「調べ、考え、伝え合う子どもを育てるための授業力向上」研究紀要，
<http://www.aen.arakawa.tokyo.jp/ogudai6-e/kenkyuuh21/kenkyuh21.pdf>
- R.M.Gagné, W.W.Wager, K.C.Goras, J.M.Keller（2005）Principles of Instructional Design（Fifth Edition），鈴木克明・岩崎信監訳（2007）インストラクショナルデザインの原理，北大路書房
- 澤本和子（2009）「実践知形成のための教員養成カリキュラム「授業研究論」の開発～熟考と省察を通じて形成する実践知モデルを基盤として～」，日本教育工学会第25回講演論文集
- 鈴木克明（1995）「魅力ある教材」設計・開発の枠組みについて－ARCS動機づけモデルを中心に－，教育メディア研究，1（1）：50-61
- 吉崎静夫（2008）「事例から学ぶ 活用型学力が育つ授業デザイン」，ぎょうせい

A Development of the In-service Training System in the School including the Teacher's Collaboration and Reflection Activities : A Case Study on Lesson Study within Ogu-Dairoku Elementary School

Masatoshi NANBU* • Hidenori HASEGAWA** • Isao KINJO***
Minoru KOBAYASHI**** • Hiroshi URANO*****
Koji MITSUHASHI***** • Hisayoshi INOUE*

ABSTRACT

The Authors developed the In-service Training System for lesson study within the school. And this program is contained in Ogu-Dairoku Elementary School about four years.

The feature of this program is contained the following two elements. 1. workshop type training by teacher's collaboration, 2. teacher's reflection activities. Using the idea of ID (Instructional Design), we took three strategies of, 1. use of ICT (Information and Communication Technology) and the information education, 2. practical use of the books and the reading guidance, and 3. use of power of people in region and the school-home cooperation.

When the program was accomplished, we took the methods of an effective, attractive instructional design, teaching/learning process and evaluation of teaching.

As a result, it was suggested to extend from the beginning teacher to the skillful teacher through the practice of this program, and to contribute to the improvement of teacher's competency of lesson management and the improvement of child's scholastic attainments.

KEY WORD

Teacher Education, In-service Training System within the School, Improvement of Teacher's Competency of Lesson Management, Improvement of scholastic attainments, Collaboration, Reflection, Workshop

* School Education ** OGU-DAIROKU Elementary School *** SHIMAJIRI Institute for Educational Research
**** Ryukyu University ***** Akita University ***** Hokkaido University of Education